



雷電面 一面

指定 昭和四十八年六月三十日

所在地 いわき市泉町下川字神山前

所有者 出羽神社

江戸時代・万治三年(一六六〇)

高さ 二二・五cm、幅 一六cm、厚さ 一一・五cm

雷電は、能の演目の五番目物に属し、その筋は次のとおりである。

延暦寺の座主法性坊の律師僧正が、天下の御祈祷のため百座の護摩をたいていた満願の夜の夜更けに、中門の扉をたたく者がいた。良く見れば、筑紫で果てたと聞いた菅丞相(菅原道真)であった。丞相の語るには、この世で果し得なかつたらみを雷電となつて内裏に飛び入り、我に憂き目を見せた者達を蹴殺すから、その時僧正は召されても参内されないようにと告げ、鬼神の相をあらわし姿を消した。

やがて紫宸殿の上に黒雲が覆い、雷鳴四方にとどろき、内裏が漆黒の闇となつたとたんに雷電が姿をあらわし、うらみの公卿達におそいかかり、荒れ狂い、王城も危うく見えたが、僧正の祈る数珠でおさまるといふ。この能のシテ雷電が用いる面である。

この雷電面は檜材を用い、彩色してある。炯々たる金色の両眼、さかだつような眉、口をかつと開き朱の舌を出し、牙をむき出した形相は鬼気せまるものがあり、鬼神の相を如実に表現している。色彩が巧みで毛描きの妙は驚くばかりである。

裏面にはつぎの刻銘がある。

万治三庚子年 奉掛 御宝前 正月吉日岩倉卿御下出掛 水野谷加兵衛作

この面は大野出目家四代の出目洞白が、水野谷加兵衛と称していた万治三年(一六六〇)一月に出羽神社に奉納したもので、津神社の翁面より四ヵ月後の作である。ともに洞白壮年期の優れた作品である。



木造男神像 一躯

指定 昭和五十六年四月二十三日

所在地 いわき市内郷綴町秋山

所有者 個人

南北朝時代・観応三年(一二五二)

像高 三五・五cm

秋山根渡神社の御神体である。葵烏帽子のようなものを頭に戴き、直垂と袴をつけて坐す。両手は屈臂して胸部で組み、両袖が左右に張り出している。しかし、この両手から両袖にかけては後補のもので、像容を損ねている。

構造は頭体幹部を通して地付まで一材で彫出し、内剥は施していない。両肩先より地付きまで通して一材を両体側に矧ぎ、胸部は横に一材を矧ぐ。現状では、葵烏帽子より頭髪にかけて墨彩、衣部に朱彩を施しているが、これらの彩色も後補である。脚部裏に以下の墨書銘がある。

根渡大明神本躰

観応三年<sup>壬辰</sup>九月 九日

旦那 ワセたの

ミやうふ

これによって、この神像が根渡大明神であることがわかり、さらに観応三年(一二五二)の造立であることが判明する。

面部や背面、局部などに鑿跡をとどめ、荒々しい作風を示す。また、衣服の皺など、細部の表現が省略され神像彫刻らしい素朴さをあらわしている。葵烏帽子を戴いた簡素な像容も、一層素朴な表現を助長している。しかし、両頬が豊かで口をしつかり結んだ顔貌表現には、体軀の形式的な造作に対して、より写実的な力強さがうかがえる。



木造虚空蔵菩薩坐像

一 軀

指 定 平成元年十二月四日

所在地 いわき市平下荒川字諏訪下

所有者 龍門寺

南北朝～室町時代初期

像高 二四・六cm

龍門寺に伝わる木造虚空蔵菩薩坐像は、水髻を結び、衲衣をまとい、右肩に偏衫をかけている。左手は胸前にかまえ手首先を欠失するが、本来は宝珠を持していたものと思われる。右手は五指をまげ、剣を持ち、右足を上に結跏趺座する。なお、銅製の宝冠、胸飾り、剣などは後補と思われる。

頭体部を通して、両耳後から体側を通る線で前後に二材を短ぎ合わせた寄木造りの構造である。玉眼を嵌入し、肉身部は漆箔、衣には盛り上げ彩色が施されている。

像高二四・六cmという小振りな造りではあるが、面貌は端正にととのえられ気品がある。肩部から脚部にかけてうねるような太めの衣文が彫出され、造立年代は南北朝から室町時代初期頃と考えられている。

本像は、その洗練された作風から中央仏師によって制作されたと考えられているが、いわき市には同時期のものとして、塩虚空蔵堂の木造虚空蔵菩薩坐像(市指定)など複数の虚空蔵菩薩像が遺されており、この地方における虚空蔵信仰の広がりや物語る作例として貴重である。

なお、龍門寺の草創については岩城氏の虚空蔵信仰が深く関わっていることが知られている。



木造聖観音菩薩立像 一躯

指 定 平成元年十二月四日

所在地 いわき市平山崎字梅福山

所有者 専称寺

室町時代初期

像高 六九・二cm

専称寺書院に安置されている木造聖観音菩薩立像は、宝冠をいただき、天衣・条帛をかけ、裳をまとって立つ。左手は腹前に屈臂して未敷蓮華を持ち、右手は胸前にかまえ、掌を体側に向け、五指を伸ばす聖観音菩薩の通例の姿をみせている。頭部は髻頂より両耳前を通る線で前後二材を結び合わせ、体部も体側を通る線で前後二材に結び、両肩、肘、手首、足首をそれぞれ結び寄せる寄木造りの構造で、玉眼を嵌入し、肉身部に漆箔が施されている。

台座軸棒には次のような墨書銘がある。

夢相感得我開祖梅福山

専称寺開基最初祭鬼門

勧請観世音菩薩丑寅間

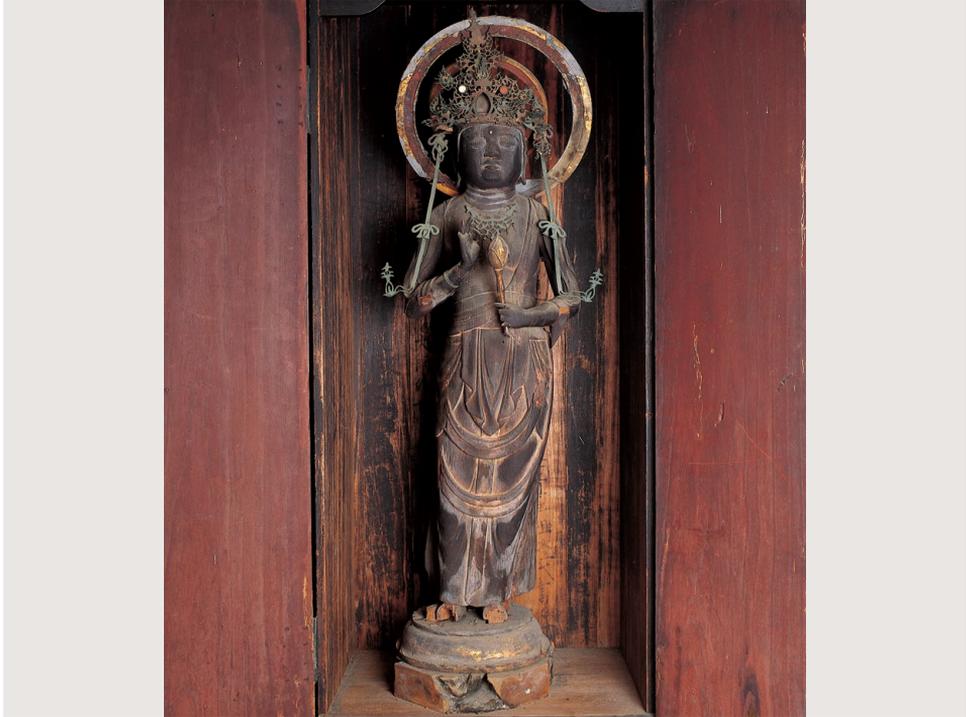
祈報恩院繁栄焉

永享五癸丑年□理□

謹而書之

この銘文によると、専称寺開祖良就上人が同寺を建立した時に、鬼門である丑寅の角に観世音菩薩を勧請して、寺の繁栄を祈願したことを理中(三世良鑑上人)が夢相感得し、永享五年(一四三三)に本像を造立したことが知られる。

本像は全体に洗練された作風をみせ、中央の仏師の作と考えられ、室町時代初期の在銘像として貴重な作例のひとつに数えられる。



木造聖観音菩薩立像 一躯

指定 平成元年十二月四日

所在地 いわき市好間町下好間字大館

所有者 青雲院

平安時代後期

像高 八二・七cm

観音堂の厨子に納められている木造聖観音菩薩立像は、單髻を結び、彫り出した山形宝冠をいたたく。左手は屈臂して腹前で五指を曲げ未敷蓮華を持し、右手は胸前にかまへ第一指、第二指を捻じる。天衣・条帛をかけ裳をまとい、天衣は大腿部及び膝前をわたり両体側に垂下し、腰をやや左に捻じた姿勢をとり、右足をやや前に踏み出している。眼は彫眼、三道、天冠台を彫出する。また銅製の臂釧、腕釧をつけ、素地仕上げである。頭体を通して一材で造られ、頭頂から両耳後と体側を通る線で前後に割矧ぐ。両肩先、銅製の宝冠及び胸飾りは後補と思われる。天衣と足先の一部を欠く。また両眼、両頬、鼻先の一部が削り直され、そのため面貌の表現がやや損なわれている。技法と作風から在地で制作されたとみられ、造立年代は平安時代後期と考えられている。

また、厨子内側背面に記された墨書銘により、元禄七年(一六九四)に没した磐城平藩内藤家の重臣、松賀忠右衛門の菩提のために、元禄十三年(一七〇〇)に青雲院に本像が寄進されたことがわかる。

なお、腰を左に捻じ、右足を前に踏み出した姿勢をみせていることから、本像は当初単独の観音像ではなく、脇侍菩薩像として造立された可能性が指摘される。



木造虚空藏菩薩坐像

一 軀

指 定 平成四年三月二十七日

所在地 いわき市平塩字宮前

所有者 塩 区

南北朝時代・康永四年(二三四五)

像高 八四・五cm

塩虚空藏堂に安置されている木造虚空藏菩薩坐像は、八面の木製宝冠をいただき、天衣・条帛をかけ、裳をまとい、右手は膝上に置き、掌を上に向け五指を伸ばす。左手は胸前にかまえ第一指、第二指先を捻じ、右足を上にして結跏趺坐する。頭部部を一材で彫出す、いわゆる一木造りの構造で、眼は彫眼である。内割り像が像底部より施され、三道、頭髪、臂、腕、腕を彫出す。なお現状では左手指先の一部を欠くが、両肘より先及び胡粉地は後補と思われる。

胎内部及び脚部の内刳面に墨書銘が記され、大旦那、勸進僧、結縁者の名前が多数認められるが、摩滅により現状では判読が難しい。しかし銘文中に康永四年(三四五)の年紀が認められ、この年に本像が造立されたと考えられている。

本像の天衣や条帛、裳には衣文が刻まれず簡略化された表現がなされ、また切れ長の面貌にも地方色が認められ、在地において制作された在銘像として貴重であると同時に、当地方における虚空藏信仰の広がりを示す作例としても重要である。



木造如意輪観音坐像

一躯

指定 平成六年三月二十五日

所在地 いわき市平字北目町

所有者 普門寺

鎌倉時代後期～末期

像高 五六・八cm

普門寺は、鎌倉末期を代表する禅僧痴鈍空性禅師によって開山された臨済宗の寺院である。

本像は、普門寺の付属仏堂である北目観音堂(磐城三十三観音の第一番札所)の厨子に安置されている。天衣を両肩にかけ、裳をまとい、高髻、面六臂、右膝を立てて足裏をあわせた如意輪観音菩薩の通例の姿勢をとる。

本像の構造は榿材の寄木造りで、頭体部とも前後二材で矧ぎ合わせ、膝前を別材で矧ぎ寄せている。また、三道、天冠台を彫出し、玉眼を嵌入し、彩色の一部が残り、左右膝部と脛部に切金文が施されている。銅製の宝冠、胸飾りは後補と思われる。また、台座に元禄十五年(一七〇二)再修(修復)の墨書銘がある。

六手の一部に損傷が認められるが、保存状態は比較的良好である。ややうつむき加減ながら張りのある面相をみせ、胸部、腹部は量感があり、複雑に折り返す衣文の流れは太く、深く彫り出される。

六手の如意輪観音菩薩の複雑な形相を破綻なく造形化した本像は、その衣文の表現に宋風の影響が指摘されており、制作年代は鎌倉時代後期～末期と考えられている。

なお、平成十年に修復が施されている。



木造地藏菩薩半珈像

一 軀

(附) 五重相伝 六紙 布薩戒血脈 一紙

口伝類 七紙 紙札 四枚

指定 平成十六年四月二十八日

所在地 いわき市遠野町上遠野字根小屋

所有者 円通寺

江戸時代・貞享元年(二六八四)

像高 七五・二cm

地藏菩薩は、地藏十王經の信仰普及とともに閻魔王の本身と説かれ、地獄における救済者として信仰を集めるとともに、現世における貧困や病苦からの救済をも兼ね備えた尊像として鎌倉時代以降、全国的に夥しい数の地藏像が造立された。

本像は、左足を踏み下げて座る、いわゆる半跏形式の地藏像である。構造は、寄木造り、玉眼嵌り、古色仕上げである。

像底部裏面に墨書銘が認められ、貞享元年(二六八四)に下野国宇都宮町仏師右京により造立されたことが明記されている。

本像内には、慧照なる者の浄土宗名越派の五重相伝と、布薩戒の血脈が納められていたが、現在は外に出されている。

五重相伝は初重から五重まで揃っており、名越派の本山専称寺の末寺である白河城下の大悲山専念寺から、延宝三年(二六七五)に授けられた相伝である。

布薩戒血脈は、延宝五年(二六七七)に同じく専称寺の末寺である二本松城下の善性寺が授けたものである。

本像は、宝珠、錫杖を執る典型的な地藏半跏形式の特徴を示し、造立年と仏師名が明らかな墨書銘を有することにより、江戸時代に造立された多くの地藏像を考察するうえでの貴重な基準作のひとつに位置付けされる。

また、同像の胎内に納められていた血脈等の文書類も、当時の庶民信仰を伺う点において貴重である。



木造十一面観音菩薩立像

一 軀

指 定 平成十七年四月二十七日

所在地 いわき市小名浜野田字峰岸

所有者 禅福寺

平安時代後期(十二世紀)

像高 一六六・八cm

本像は、頭体通して両足まで一材で彫出し、背面肩より裳裾まで通して内刳を施す一木造の技法は素材であり古様である。体軀は細く、背面の内刳をふさぐ背板が失われているとはいえ体軀の奥行も薄い。わずかにみられる両肩より垂下する天衣や裳裾部の衣の襷の彫出は浅く穏やかなものとなっており、十二世紀後半の造立と考えられる。

なお、頭上面のすべて、鼻先、両腕の各肘より先、両足先などの後補部は、観音堂内の観世音菩薩再興の棟札により、享保十四年(一七二九)に補われたものと考えられる。

市内では出蔵寺明王形立像(県指定)や白水阿弥陀堂諸像(国指定)など、平安時代の前期から後期にかけての遺例が伝えられているが、全体からみればこの時代の仏像は少ない。

そのような中で、この時代の仏像のすがたを保持している本像は見逃すことができない。素朴な技法や造形から当地方での造立とみなされ、平安時代後期の在地の造像活動を伝える数少ない遺品である。



木造迦葉・阿難立像

一二軀

指定 平成十八年四月二十八日

所在地 いわき市常磐湯本町三函

所有者 勝行院

南北朝時代(十四世紀)

迦葉 像高 一六一・二cm

阿難 像高 一六〇・二cm

迦葉、阿難とも釈迦十大弟子のうちで、迦葉は頭陀第一といわれ、弟子中でも中心的存在といわれている。また、阿難は常に釈迦に随侍し、多聞第一といわれる。

釈迦堂本尊の釈迦如来坐像の左右に安置されている。「石城郡誌」によれば、両像は釈迦如来坐像の脇立とあり、両像を脇侍として釈迦三尊像としてつくられたものであろう。

迦葉像は衲衣をつけ、両手を胸前で組み合わせる。阿難像は法衣をつけ、左肩より袈裟をかけ、両手は胸前で合わせ合掌する。

正統的な寄木造の技法で、迦葉は老年相、阿難は若年相とよく両者の特徴的な相貌をとらえ写實的に表現されており、衣の装は太く、深く彫出されている。

鎌倉時代の写實的造形を継承しながら形式化を進めた造形で、南北朝時代の造立と考えられる。寄木造の技法も正統的で、作風も同様であり中央(鎌倉)の正系仏師の作と考えられる。

堂々とした造形で、南北朝時代の当地方を代表する大作である。



木造阿彌陀如来立像

一躯

指定 平成二十年三月二十八日

所在地 いわき市常磐湯本町三函

所有者 惣善寺

鎌倉時代(十三~十四世紀)  
像高七八・六cm

来迎印を結ぶ阿彌陀如来立像で、両眼には玉眼を嵌入し、寄木造の技法でつくられている。根幹部の構造は頭体幹部を通して頭頂より両耳後、体側を通る線で前後に二材を短じ、内短じ、三道下を通る線で頭部を短じ、さらに頭頂より両頬を通る線で面部を短じ、衲衣下縁を通る線で裳裾部も短じ、像全体に古色が施され、表現には固さが残るものの、両頬の肉をそいだような顔貌には若々しい表情があふれる。衣の襞の彫出は自然な流れをつくり、背中には盛り上がるような肉付けがあり、顔貌表現とともに写実的な造形がうかがえる。頭頂の肉髻部が低く、髮際線が額中央で垂れ下がりが緩く曲線を描いているところなどに、鎌倉時代後半に流行した中国の宋代美術の影響(宋風)がみとめられる。

裳裾部を短じ短じは像内に納入品を納めるために行われたといわれ、文永元年(一二三四)銘の恵日寺(四倉町玉山)の阿彌陀如来立像にもみられる。

造形上も両像は共通するところがあり、恵日寺像と同時期か、やや遡る頃の造立と考えられる。鎌倉時代の正統を継いだ仏像として、造形的にも優れ、市内では類例が少なく貴重な遺品といえる。しかし、伝来についての詳細は不明である。



木造阿彌陀如来坐像

一 軀

指 定 平成二十二年一月二十一日

所在地 いわき市勿来町白米赤坂

所有者 白米区

平安時代(十世紀後半)十一世紀前半

像高 一八二・五cm

螺髪を植付とし、左肩を覆い右肩に少しかかる衲衣をつける。左手は屈臂して膝上におき、右手は屈臂して前に出し、それぞれ親指と人差指の頭を捻じる。左脚を外にして結跏趺坐する。頭体通して左体側部及び右手上膊部をも含んで一材で彫り出す一木造の技法は古様である。大きな頭に鼻梁の太い厳しさの残る顔貌表現も古様をとどめる。

厨子内部に文政十二年(一八二九)の修理時の墨書銘があり、肉髻頂部の小材、螺髪、後頭部及び体軀背面の蓋板、両手、脚部材、両腰脇先の小材、左前膊外側の材、裳先、漆箔及び彩色、頭体材と脚部材の間の薄材は、いずれもこのときのものと思われる。

後補の部分が多いものの、頭体幹部は当初のすがたを伝えており、技法や造形から平安時代も比較的古い頃の造立と考えられ、この時代の作例はいわき市内では非常に少ない。また、坐像でこれ程の大きさの像は、市内では貴重といえる。



木造金剛力士立像

一 軀

指 定 平成二十二年四月二十三日

所在地 いわき市勿来町白米赤坂

所有者 白米区

平安時代後期

阿形像高 二七六・八cm

吽形像高 二九二・三cm

上半身裸形とし、裳をつけて立つ。阿形像は口を開け、左手を腋に構え、右手に金剛杵をとる。吽形像は口を閉じ、左手を下げ、右手をあげて金剛杵をとる。

現状では頭部を別材とし首で上下に短く、体軀は両脚まで一材で彫出し、内刳りはない。両腕はそれぞれ肩で短く、基本的には両像とも以上のような一木造の技法で、そこに腹部や背面に多くの補材をあてる。さらに阿形像では両足先、裳先を短く、吽形像では両足首より先を短く。

明治初年に、出蔵寺(勿来町酒井出蔵)より移したと伝える。

頭部や両腕は後世に補われたもので、体軀も腹部などに後の補材が多く当てられており、前面胸部及び腰部にわずかに当初のすがたをとどめる。この部分は平安時代のものと考えられる。平安時代でも後期の造立と考えられ、明治の頃などに大きく修理の手が加えられ現状のすがたに至ったものであろう。

頭部が後補のものにかわっている体軀の多くの部分に補材や埋木があり、ほとんど当初のすがたをとめていないといっても過言ではない。しかし、現状でも二mを越す大きさがあり、桂材の一木造の技法は古様で、わずかに残る当初部分である前面裳の彫出は穏やかに整っている。さらに足の踏み出しも少なく、動きを抑えた体軀で、類例の少ない平安時代の金剛力士像といえる。



木造男神坐像

一 軀

指 定 平成二十六年五月一日

所在地 いわき市平下高久字馬場

所有者 八剱神社

室町時代

像高 一一・〇cm

この像は中子の高い冠をかぶっている。中子とは冠の頂上後部に高く突き出ている部分であり、髻もどりを入れて、根元に笄こうがを挿して冠が落ちないようにするものであるが、本像の笄は欠失している。襟首の低い袍ほう(縫ほ腋えき袍のう)をつけ、大口袴をつける。石帯を巻く。両手屈臂くつひして胸前で右手を上にし、左手を下で重ねる。それぞれ五指をまげ、右手には笏しやくのためと思われる穴があるが、持物は欠失している。杵きねをはき、両膝を立てて腰をおろして坐す。

一木造、彫眼、現状は素地をあらわす。木心を右後方にはずした一材で、中子冠より頭体通して両手及び両足先をも含んで、地付きまで彫出する。内刻はない。表面には当初の彩色は見られないが、一部に墨彩が残り、凹部には胡粉が見受けられる。

概ね倚像の類例は少ない上に、しゃがむように両膝を立てて坐している姿は類例がなく、儀式の一場面をあらわしたものと推測される。桂の一材で、像のすべてを彫出しており、神像彫刻らしい素朴な技法である。中子冠や衣服の大体の形態は把握されているが、細部の表現は省略され造形にも素朴さがある。

本像は丸々とした輪郭に短く小鼻の張った鼻、丸く大きな目、緩やかに弧を描く眉の線などがかるうじてわかる。摩滅があるものの、かわいらしい表情がうかがえる。衣服には衣襷いす文が施されておらず、胡粉の遺存などから、彩色によって仕上げられていたものと推定され、室町時代の造立と考えられる。



木造不動明王立像 一 軀

指 定 平成二十八年五月二日

所在地 いわき市遠野町上遠野字根小屋

所有者 円通寺

室町時代・嘉吉二年(一四四二)

像高 四八・八cm

右耳のあたりに群青彩が残る。肉身部はもとも群青彩が施されていたものと考えられる。

錆漆地彩色がよく残り、詳しい構造は不明ながら正統的な寄木造の技法でつくられている。また、彩色は華麗で金泥を多用し、種々の文様が精緻に描かれている。腰以下がやや細く、それに反して頭部、上半身は奥行きもあり量感豊かである。衣の襷の彫は細いが、裾の折り返し部は深く彫り出される。腰を右に捻った体の動きもおとなしい。頭部から上半身の量感や裾の折り返し部の彫出には南北朝時代の造形がみられるものの、衣の襷の彫出や体のおとなしい動きなどから室町時代に入る頃の造立と考えられる。

大正十四年(一九二五)五月書上の『寺有財産帳』(円通寺蔵)の大師堂本尊不動明王厨子入立像の条に「嘉吉二年 館主 上遠野大炊助御本尊」とあることから、嘉吉二年(一四四二)頃の在地領主層の造立と思われる。この像の正統的な技法や造形は当地方の有力な領主層の造像にふさわしいもので、室町時代初期における在地の有力武士(国人領主)の遺品として、歴史的にも重要である。